

# 私の保育



元 木 正 子

桜吹雪の舞い散る園庭で、記念写真の撮影も無事に済み、ほっとする。わが子と手をとり合いながら、母親たちも入園の喜びをかくし切れないような面持ちで、担任の話を聞きに、また園舎へと向う。

昭和五十年四月、開園式を迎えた幼稚園に、私もまた、子どもたちといっしょに遊べる喜びをかみしめていた。

保育の原理を、この子どもたちの上に一心に考え、子どもといっしょに数々の遊びを創り出し、保育者としては、常に学び、修養する心を失わず、明かるく、いきいきとした姿で保育を展開できるように心掛けたと思う。明日から、この庭で、保育室で、子どもたちはどんな気持ちで遊びをくり広げるのであろうか。三人の保育者は、ひとりひとりの子どもの顔を思い浮かべながら、それぞれに感慨一しおのひとときを持って話し合った。

## 自然の中の幼稚園

幸せなことにこの園舎は、杉、松の木でかこまれた広い園庭がある。村から拝借した仮の園舎であるが、朝は野鳥が集まり、幼稚園にただただ何か気持ちがいせいで来る。この自然の美しさ、偉大さを最大限に活用した保育を試みよう、七月の終業式の前後、夜の幼稚園の庭で子どもたちと過ごす集まりもあった。庭に薪を積み上げ日の暮れるのを待つ。夕方六時、子どもたちは興味しんしんといった顔で登園して来た。だんだん日が沈み、園庭の木立ちがシルエットになって見え始めた頃、薪をかこんでまゝなる。子どもたちの知っているうたをうたいながら待っていると、年長組の子どもたちが、自分で作った紙のロウソクを薪に近づけると担任が火をつける。「もえろよもえろ」のうたを母

親たちも合唱していると、ばちばちと火の粉を撒き散らしながら、空高く煙は登って行った。子どもたちから喚声がる。何時の間にか辺りはまっくらになり、赤い炎に照らし出された子どもの顔は、みなはち切れそうににこにこしていた。

稲藁で作った馬にのってレースを始める。子どもたちはみんなインデアンインディアンの羽かざりをつけて走り廻る。丁度魔法使いが箒に乗ったように、馬の耳をしっかりと握って走ると、つけた鈴が素朴な音を出して鳴っていた。「インデアンが通る」をうたいながら、半円では物足りないような子どももいたが、とに角思い切り力を出してかけ廻った満足感が見られた。後は母親たちとみんないっしょに、フォークダンスをした。

約一時間、子どもたちは涼しくなった山の空気を一杯吸いながらこの会は終った。山の夜の景色は、子どもにどんな関心を持たせてくれたであろうか。保育者は無事にすんだと思うと同時に今年だけでなく、また来年も、子どもの喜ぶ顔が見たくなっていた。私たちのこの遊びは、少しでも子どもたちのこころを豊かにすることに役立てば本當にうれしい気がする。

## 豆まき

鬼のお面は、子どもたちが作る。豆撒きはこの村のやり方をと

り入れて、子どもたちに経験させてあげようと考えた。地元出身の先生から、鯛いわしの頭を豆殻まめがらにつけておまじないを言うことを教えてもらった。

園庭で子どもたちに枯れ葉を集めてもらい、金物のほうろく鍋をかまど代りの石油カンにのせて豆を煎った。出て来る煙を鯛の頭に代る代るつけながら、「おこりんぼむしとんでゆけ」「なきむしとんでゆけ」「○○むしとんでゆけ」と自分で考えたおまじないを言っていた。

全部の子どものおまじないがすんだ後、鯛の頭は玄関の入口に柵の枝にさして豆まきをすると、もう鬼が入ってこないことを話す。子どもたちはあたたかい豆を撒き、年の数だけ食べてまめまきは終った。

この一年の中のささやかな経験を書いたのであるが、保育の中にかかされる行事のとり入れ方に、このような方法はどんなものかと模索中である。新しい幼稚園ということもあって、伝統もないが、ひとつひとつの子どもの経験が、将来、精神生活を豊かに出来る何かの力になれば嬉しい。よりよい保育の積み重ねがなされるよう、常に初心にたち帰り、謙虚に反省をしてゆきたいと思う。

(城西大学付属鳩山幼稚園)